

読書のすすめ

立志館セミナーから、この夏おすすめの本を紹介いたします。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

水族館ガール

木宮 条太郎（もくみや じょうたろう） 実業之日本社文庫

桐先生

暑い夏！水族館の世界へ、旅立ってみませんか？

主人公の由香は、三年間働いていた市役所から、なぜか水族館での勤務を命じられます。金魚を飼った経験しかない由香にとって、そこは未知の世界。由香と一緒に、イルカやラッコなどの知られざる生態や水族館の裏側を学ぶことができます。いつもは「きれいだね」と言って通り過ぎてしまいう水槽に、どんな秘密が隠されているのか。飼育員たちはどんな工夫をしているのか。そもそも水族館とは、何のためにあるのか。

読んだらきつと、水族館に行きたくなること間違いなし。そして、今までは違った視点で水族館を楽しめるでしょう。イルカたちが、皆さんを待っていますよ！



ふたりの

赤川 次郎（あかがわ じろう） 新潮文庫

吉美先生

みなさんの人生にはこの先どんなことが起こるのでしょうか？この先どんな人と出会い、どんなことで笑い、泣き、どんな風に大人になるのでしょうか。

『ふたりの』は、普通の中学生が大人へと成長していく数年間を描いた作品です。なんでもできてすっかり者の姉・千津子と、対照的に平凡な妹・実加。仲良しの姉に頼りきりの実加でしたが、千津子が交通事故で亡くなってしまいます。そして、ある出来事をきっかけに、実加にだけ千津子の「声」が聞こえるようになります。

千津子の「声」と暮らして、どんな人も秘密や悩みを抱えながら奮闘しているのだということに気づいた実加は、色々な困難を乗り越えて、一人の大人として自立していきます。

みなさんも、この先色々な困難に出会うでしょう。でも、それは決して悲観すべきことではありません。みなさん自身の解決法で思い思いの人生を築き上げて、魅力的な大人へと成長していかせてください。

いのちの食べかた

森 達也（もり たつや）

高島先生
角川文庫

知ること、それは時に辛いことにもなります。たとえば、ふだんわたしたちが食べている「お肉」。買い求めやすいように、食べやすいように、「だれか」が「こ」か「こ」で「何か」をしてくれている。うすうすそれは知っていても、実際どういことが行われているのかを知ってしまうと、お肉が食べられなくなるんじゃないか……。しかし、筆者は書きます。それでも「僕は知りたい。知らない自分がいやだ」「知ること」で「思」うこと」ができる」と。

世の中には情報があふれています。そして、わたしたちの思考や行動に大きな影響をもたらします。だからこそ、まちがった情報に振り回されないために、一つのものの見方にしぼられないために、「知ること」の大切さをこの本で「知って」みてください。

探偵の探偵

松岡 圭祐（まつおか けいすけ）

山田先生
講談社文庫

悪質な探偵に個人情報暴露され、妹がストーカーの犠牲になった過去を持つ主人公の女性。高校卒業後、探偵養成スクールに通い、探偵の技術を学ぶ。主人公の思いに共感したスクールの校長兼、探偵所所長の元で探偵相手に捜査し、悪を裁いていく。

実際に使われている探偵の手法が書かれているので、普段知る機会のない世界を知ることができます。また、どんなに追い詰められても決して諦めない主人公の姿に、勉強や部活でくじけそうな自分を奮い立たせるヒントも得られるはずですよ。

ヴォイド・シエイパ

森 博嗣（もり ひろし）

松本先生
中公文庫

この作品はタイトルからは想像できない「剣豪モノ」の時代小説です。物心がついたころから、カシウウという男に預けられ、山深い中で暮らしていたゼン。世間に触れることなく、生きるために食べ物を探し、剣の道を教えられることなく、生きたカシウウの死をきっかけに山を下りる。婚約者と勝負をしてほしいという女性や、死を覚悟して果たし合いに挑む男性などとの出会い、ゼンは色々考えることになる。

剣の道とは？ 生きることは？ なぜ、山で生活していたのか？ ゼンの出生の秘密は？
ゼンの苦悩と成長を、体感してはどうでしょうか。

キラキラネームの大研究

伊東 ひとみ（いとう ひとみ）

濱口先生
新潮新書

最近、キラキラネームという言葉をよく耳にしませんか？簡単に言うと、読み方が難しい「珍しい名前」のことです。近年、このキラキラネームが増えてきていると言われています。しかし、実はこのキラキラネームは、最近になって初めて登場してきたわけではありません。日本人のこの珍しい名前をつける気質は昔からあり、みなさんが歴史の授業で習う多くの有名なキラキラネームに関わりをもっていたのです。

たとえば織田信長。彼は子供にかなりユニークな名前をつけていました。長男に「奇妙丸（きみょうまる）」、八男に「酌（しやく）川酒をつぐこと」、九男に「人（ひと）」、十男に「良好（りょうこう）」、十一男に「縁（えん）」と……。他にもみなさんが知っている歴史上の人物は、多くの人がキラキラネームと関係していました。みなさんもこの本を手にとり、日本人の気質を探ってみてください。

舟を編む

三浦 しをん（みづら しをん）

井上先生
光文社文庫

「右は、体を北に向けたとき、東にあたるほう」この一言で、出版社に勤める馬締光也は営業部から辞書編集部へと異動になってしまふ。辞書編集部では、新しい辞書『大渡海』の完成に向けて働くことになる。

辞書を作るとはどういうことか？ 言葉とはどういうものなのか？ 日々、問題にぶつかりながらも、『大渡海』のために奮闘する。そんな中で出会った人々や出来事をきっかけに、人付き合いが苦手な馬締が成長していく。

言葉を説明するときに、どう表現すれば正確に伝わるのか。この物語は、そんなことを考え続けて辞書作りに奮闘する人々の物語です。一つ一つの言葉の大切さ、人とのつながりの大切さがこの本からは伝わってきます。

阪急電車

有川 浩（ありかわ ひろ）

田中先生
幻冬舎文庫

最近、電車に乗って周りを見回してみても、大抵の人が読書をしているか、携帯電話を見ている。だから、偶然同じ時刻の同じ電車の同じ車両に乗り合わせても、特に誰とも関わることはありません。しかし、この話の主人公は、そういう人との小さな出会いを大切に、そこで関わった人から、今後生きていくためのヒントをもらい、前向きに生きていきます。ほっこりとした気分になりたいという人におすすめです。

信長死すべし

山本 兼一（やまもと けんいち）

阪口先生
角川文庫

日本史上最大のミステリーと言われる「本能寺の変」。織田信長の有能な部下であった明智光秀が信長を自害に追い込んだことは世に知られています。なぜ光秀がそんな行動に出たのかは明確には分かっていません。この本はその本能寺の変の「黒幕」について、作者独自の目線で鋭く描いたものです。

大きな特徴としては、一つの物語が進行しながらも、章ごとに主人公が異なる点です。信長や光秀はもちろん、天皇である正親町帝、公家の近衛前久といった人物たちも登場します。これらの人物たちの心理状況を巧みに描くことで、読者を小説の世界に引き込み、本能寺の変が起きるまでの一か月半をスリリングかつ、スピーディーに仕上げています。

この小説を読むと、歴史に対する見方が大きく変わると思います。皆さんが当たり前だと持っている歴史上の出来事も、視点を変えると全く違ったものに見えてくるかもしれませんね。



和菓子のアンソロジー

坂木 司（さかき つかさ）

高木先生
光文社文庫

「和菓子」と聞いて皆さんは何が思い浮かびますか。この一冊には、十人の作家による和菓子にまつわる短編が集められています。また、それぞれの物語の時代、場所はさまざまです。刑事が出てきたり、幽霊が出てきたりと物語の雰囲気もさまざまです。

一つ一つのお話は長くはないので、長いお話を読み切る自信がない人にもおすすめです。前から素直に読むもよし、気に入った作品から読むもよし。この夏、ぜひ、お気に入りの一編を見つけてください。

きみの友だち

重松 清（しげまつ きよし）

洞淵先生
新潮文庫

主人公の恵美は小学校四年生の時に遭った交通事故が原因で足が不自由になってしまいます。事故の原因が友達の悪ふざけだったため、友達を責め、友達を失ってしまいます。

このような状況の中、恵美は入院生活が長く友だちとあまり一緒に過ごしたことがない由香と出会います。恵美と由香の間には徐々に絆が生まれ、その絆が恵美や、恵美の周囲の友達たちを動かします。

この機会に友達とは何かについて、考えてみて下さいね。

海の底

有川 浩（ありかわ ひろ）

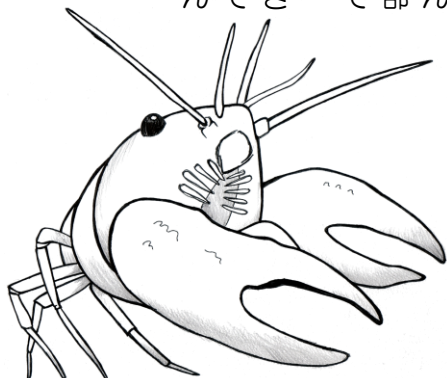
名倉先生
角川文庫

海上自衛隊基地でのイベント中に突如巨大なザリガニが来襲し、次々に人を食べていく！自衛隊の隊員である主人公の夏木大和は、近くにいた子供たちとひとまず潜水艦にたてこもり救出を待つことにするが、その子供たちはさまざまな闇を抱えていて……。

物語を読むうえで大切なことは頭の中で場面をイメージすること、登場人物の気持ちを読み取ることです。

この小説はその練習に最適！巨大ザリガニの登場シーンや戦闘シーンは、読みながら場面を想像すると迫力満点です。なにより、一緒にたてこもった子供たちの気持ちがとても繊細に、豊かに描かれています。子供たちの年齢も比較的にみなさんと近いこともあり、共感できる部分や納得できるところがあるので読んでみましょう。

最後の場面を読み終わったときはきつと温かい気持ちに包まれていると思いますよ。ぜひ一度読んでみて下さいね！



Long, Long ago ロング・ロング・アゴ

重松 清（しげまつ きよし）

池本先生
新潮文庫

今、あなたたちの周りにはどんな友達がいますか。スポーツの得意な子、読書の好きな子、いつも元気でお調子者の子……。そんな周りにいる友達は、将来、どうなっているでしょうか。あなた自身は十年後、二十年後どんな人生を送っているでしょうか。「わからない」。確かに人生なんて、わかりません。だから、みんな「今」を必死に生きるのでしょうか。

このお話の主人公たちはみんな「こんなはずじゃなかった人生」を送っている大人です。彼らにも青春時代があったのです。甘酸っぱく、時には苦い青春を送った大人たち。彼らの青春時代に共感したり、疑問を感じたりするかもしれません。さまざまな思いを抱きつつ読み進めると、彼らには、昔出会ったさまざまな人との「再会」という奇跡が訪れます。彼らの六つの小さな奇跡を読んで「生きる」ということの大切さを感じて欲しいと思います。

空気なんか、読まない

鎌田 實（かまた みのる）

八百先生
集英社文庫

空気にまつわる感動的なエピソードが詰まったエッセイ（随筆）集です。「空気ってなんだろ」「空気に流されない」「空気に負けない」「空気をかきまわせ」「空気に染まってみる」「空気を考える」という六章全てに共通して描かれているのは、自分の信念に基づいて行動し、周囲を動かす、あたたかな空気を作り出してきた人達の心豊かな生き方です。

筆者は最後にこう締めくくっています。「空気に流されるな。空気をつくり出せ。空気をよどますな。空気をかきまわせ。それが新しい生き方になる。それが新しい時代をつくり出す。信じていい。空気は……読まない。」と。

読み終えた後には、生きることに対して前向きになれると思います。読みやすい文章なので、ぜひ読んでみてください。

あと少し、もつ少し

瀬尾 まいこ（せお まいこ）

久常先生
新潮文庫

陸上部部長の榊井は中学校三年生。中学最後の駅伝大会に向け張り切っていた矢先、顧問が頼りない美術教師・上原になってしまったため、先が見えない不安に襲われる部員たち。彼は部長として、誰にも弱音を吐かず、いつも明るく皆を引っ張っていきます。そんな彼に説得されて集まったメンバーたち五人。元いじめられっ子でいつも周りの様子をうかがっている設楽、何からも逃げてきて、不良として恐れられるようになってしまった大田、「人に頼られたら断らない」をモットーにしてきたジロー、弱みを見せまいと必死になった結果、プライドが高くなってしまう渡部、そして、榊井をこよなく尊敬する後輩の俊介。ときにはぶつかりながらも、少しずつ絆を深めていくメンバーたち。本番に向けて、順調に仕上がって行く中で、ただ一人、榊井だけが思うように走れず……。そして駅伝大会当日。たすきとともに、六人のエピソードが繋がって行くこの物語は、榊井だけでなく、全員が主人公です。

「誰かのために何かするって、すごいパワーが出るんだな。」自分のために、ではなく、ここまで必死につないでくれた仲間、そして、次に待つ仲間のために、彼らはたすきをつなぎます。このお話を読み終えたとき、きつと皆さんも「誰かのためにがんばりたい」と思えるはずですよ。



立志館ゼミナール国語科